

「海外業務への展開促進に係るワークショップ(第2回)」in 大阪(後半)

国際委員会 佐々木 和嘉 | SASAKI Kazuyoshi

はじめに

前回(第40回)の国際委員会だよりでは、2019年に大阪で開催した「海外業務への展開促進に係るワークショップ」の概要をお伝えしましたが、今回はその続きとして、本ワークショップでの質疑応答や意見交換、参加者アンケートの結果について報告します。



ワークショップでの質疑応答

経験豊富な講師の語りと参加者の関心があいまった結果、質疑応答は盛り上がりました。話題の大半は、新規参入にあたりよく用いられる「補強」(自社技術者を、他社のプロジェクトメンバーの一員として参画させて、業務経験を積む方法)に関するものでした。その一部をかいつまんでご紹介します。

Q: 渡航に際して予防接種は必要か?

A: 国によっては接種が求められる場合があるので事前の確認が必要。

Q: 補強要員に求められる資格、語学力や年齢層などは?

A: 現地で調査・設計等の当該業務ができる技術的能力が必要であるが、年齢は関係ない。語学は片言でもなんとかなる。

Q: 補強の契約形態は?

A: 幹事会社との契約による。

Q: 海外業務と国内業務の兼務は可能か?

A: 兼務は一般的に難しいといえるが、プロジェクトによっては可能。

Q: 外国籍の社員でもよいか?

A: 問題ない。プロジェクト・マネージャーが外国人とい

う時もある。

Q: 補強要員はどのように選べばいいか?

A: まずはコアとなる方を補強要員の候補として選定し、実績を積むようにしてはどうか。その後、その方を中心に人数を拡大していくことが考えられる。

Q: 補強に際して競争参加資格は必要か?

A: 補強の場合は必要ない。

他に、案件情報を入手するためのJICAホームページの公示情報等の見方について、実例を交えた紹介がありました。

また、当初予定の開催時間を超過したこともあり、ワークショップ終了後には懇親会会場でさらに議論が続けられました。

ワークショップでの意見交換

「海外プロジェクトを躊躇する社員に、どうやって参加してもらおうか」という論点で、活発な意見交換がありました。

・技術者の心をくすぐる。例えばダムや海底トンネル等の新設の大規模事業へ関われる機会は日本では限

られる。そのあたりをくすぐる。

・中南米やアフリカなど自費ではなかなか行けないようなところに行ける。そのような地域や国に行くと喜ぶ人なら海外出張は嫌がらない。そういう人から始めてはどうか。

・手当が一定のインセンティブとなる。

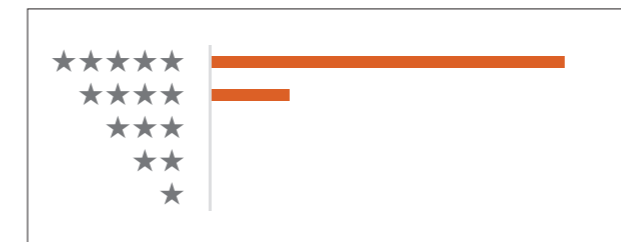
・外国語については、技術者にとって大事なものをしゃべるかであって、外国語のうまさではない。日常会話よりも専門用語の方が大事である。専門用語はそれほどの数はなく、覚えれば自分のためになる。

・国内業務の技術者が若いうちに海外業務を体験する仕組みは効果的である。

参加者アンケートの結果

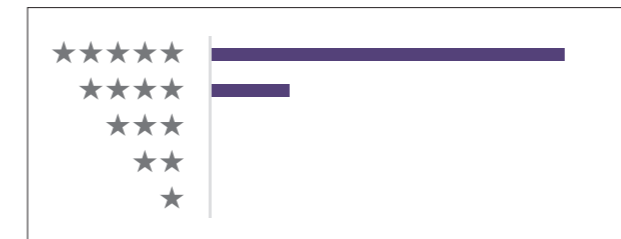
参加者に本ワークショップの満足度に関するアンケートを実施し、5段階評価とコメントを頂きました。その集計結果では、ワークショップの全体評価は高く、特に「海外事業展開に関する事例紹介」の評価が目立ちました。

発注機関の最近の動向



・ JICA 予算について知ることができた。

海外業務の形態・参画方法

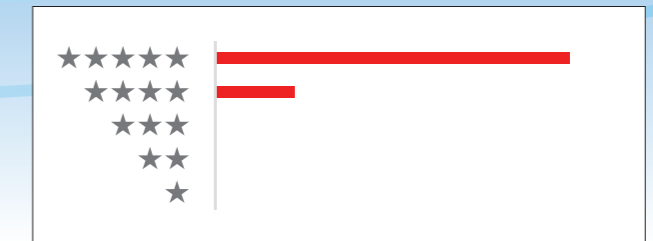


・各技術者の経歴書の作成と補強要員候補となる技術者のリストアップから始めたい。

・補強要員に関して特に参考になった。

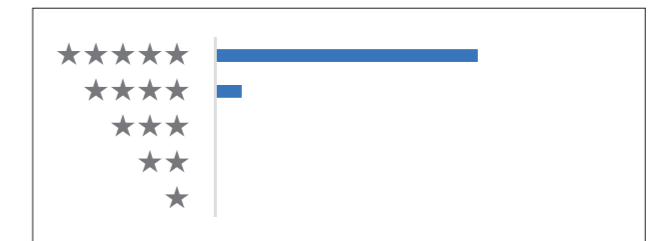
・建設コンサルタンツ協会企業の受注量やコンサルタント選定方法、新規参入方法が理解できた。

海外業務の実務状況



・新規参加方法が理解できた。

海外事業展開に関する事例紹介



・失敗事例も紹介してほしい。

その他のコメント

- ・基礎的な話で大変今後の参考になった。
- ・わかりやすく興味が大きくなった。
- ・大変有意義だった。今度も類似の企画の継続を願いたい。
- ・時間帯、場所含め、遠方からでも参加しやすかった。

おわりに

以上、2回にわたって2019年に大阪で開催した「海外業務への展開促進に係るワークショップ」について報告しました。

本稿起稿時は、新型コロナウイルス感染者の増加に伴い、日本全国で改正特措法に基づく緊急事態宣言が発令されている状況にあり、世界各国においても緊急帰国などによりプロジェクトの中断を余儀なくされています。

このような状況にあるため、今後、この続編のワークショップが開催できるかどうかは不透明である一方で、全国に向けたインターネット開催のような方法も考えられます。

本稿が皆様のお手元に届く頃には、再び2019年までの通り、海外のプロジェクトが活気づくことを切に祈ります。